

A-4 老年期の食生活に関する研究(第2報)

東筑紫短大 納身節子 ○神原信子 磯孝子

目的 第1報にて讀者らは、老年者の食事 *pattern* と、要因の關係を、一地域集團の、元産炭地区における分析を報告し、地域 *type* 別の検討を行う必要を認めた。今回、第2報は 都市(北九州市)地域集團について追究し、地域差・職歴差、の特性等を検討した。

視点としては、老化の社会構造としての、老人人口の急増・人口の老令化・核家族化・が比類のない速さで起った。この現象は、老年者の食環境の変化への不適応となり、さけられない生理的老化(機能の減退)への影響も強いであろう。

健康問題として、60才以後の平均余命は伸びていない。生命の延長は人間としての生きがいある健康生活が必要で一側面として、食生活に視点をあてたものである。

方法 内容は第1報に準じた。2地域集團を4要因(性・年令差・家族構成・職業歴・健康歴)との関連から分析し、変量分散・地域の検定を行った。

結果 過去の職業歴は、食習慣の影響として、老年期の特徴的な食事摂取 *pattern* を形成する要因の一つであった。

現在の、家族構成と性・年令差は、食品によって個人差が今回も顕著であった。今後は、階層別の検討を加えたい。